

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「臨床の知」の芸術的実践：子どもの教育問題をめぐって
Author(s)	鄭, 西吟
Citation	HABITUS , 26 : 53 - 70
Issue Date	2022-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/52154
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052154
Right	
Relation	



「臨床の知」の芸術的実践 ——子どもの教育問題をめぐって——

鄭 西 吟

(広島大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年)

はじめに

合理的「近代の知」の弊害を克服するために、哲学者の中村雄二郎は「個々の場所や時間のなかで、対象の多義性を十分考慮に入れながら、それとの交流の中で事実を捉える「臨床の知」という新たな知の範型を提起し、その必要性を唱えた。それに加えて、今日の文化・社会・政治の諸問題を将来に引き継ぐ課題と考えるとき、多くの諸問題は「子ども」をめぐり問題群に収斂している、と中村は主張する¹⁾。そのため、本論文では、「臨床の知」の枠組みにおいて「子ども」問題をとらえ、解決の方向を示してみたい。その際、科学的な知のアプローチから漏れる感情、とりわけ受苦的な課題に光を当て、子どもの問題を考えてみたい。こうした視点は、子どもの臨床場面では、学校病理（いじめ・暴力・不登校）や発達障害をかかえる子どもの問題等が顕著な例として想定できる。以下では、これらの問題を、「パトス＝痛みを感じている人間」²⁾という観点から、「臨床の知」という見方に立脚した問題解決の方途を追及していく。その治癒的アプローチとして、中村は、パトスに働きかける芸術が有効であると考えている。以下、その内実をおさえていきたい。

中村は、治療教育の専門家である川手鷹彦と対談・共著した『心の傷を担う子どもたち——次代への治療教育と芸術論』を著し、「子ども」・「教育」の受苦的な問題に向けられた「治療教育」の実践について考察している。ここでは、

子どもの療育における「臨床の知」と芸術の实践的関連性を検証し、「臨床の知」の応用倫理的な可能性が示唆される。中村は、そうした治療教育として、演劇・詩歌・音楽・絵画などの芸術を挙げており、本書では、これらの治療手段を用いて、子どもの心身を整え、生きる力をつけさせる試みが紹介されている³⁾。

第1節 荒ぶる神としての「子ども」

治療教育の問題に入る前に、まず「子ども」という概念について考えてみよう。

我々現代人にとって、子どもは未熟の人間であり、特別な扱いが必要な存在である。しかし、中村はフランスの歴史学者フィリップ・アリエス（Philippe Ariès、1914-1984）の著作『<子供>の誕生』（1960年）から、現代とまったく違う古代ヨーロッパの子ども観を読み取っている。それは子どもを大人と区別しないように認識する子ども観であり、しかも柳田国男の『こども風土記』の中に記述されている近代以前の日本社会での子どもの姿もそれと重なるところが多い⁴⁾とされている。この子ども観は具体的に次のようなものである。

近代以前の古いヨーロッパ社会では、人々に<子供>という時期がなく、人間ははじめから<小さい大人>とされた。それも、ひとりで自分の用を足すに至らないもっとも弱い、短い時期だけに限られ、自分でなんとか用が足せるようになると、<若い大人>として大人たちと一緒にされ、仕事も遊びも大人たちと共にするようになる。（中略）子供の服装にしても、近代以前の社会では、特定のものはなく、子供は大人と同じ服装をさせられていた。⁵⁾

このような子ども観から、我々は、子どもの特徴を考慮せず、子どもを強引

に大人の世界に引き込もうとした古代社会の現実を発見することができる。それに対して、現代社会では発達心理学の視点から子どもを大人の縮小版とは考えず、その固有の特徴を配慮した上で教育し、将来人間社会に適応できるように成長を促す、と考えるのが一般的である⁶⁾。こうした現代の子ども観は古代の子ども観に比べ、より正しく見えるが、しかし実際の現実はそうではない。現代の子ども観は古代の子ども観と同じ原理を持っている。この原理は「大人の秩序」というものにほかならない。というのは、子どもをどのように捉えているかに拘わらず、現代でも古代でも、子どもを最終的に大人によって作られた秩序的社會に組み込むことを成長の目的としているからである。

では、なぜ大人たちはこのようなことをするのであろうか。中村は、このことについて、本田和子の『異文化としての子ども』（1982年）を引用して次のように説明する。子どもへの私たちのまなざしが、科学的装いを持った発達心理学的な子ども観の拘束から自由になるとき、子どもは私たち大人にとって、他者であり、反秩序性の体現者になる。子どもの逸脱的な在り様が人々を脅かし、大人たちを正体不明の不安に陥れるため、大人つまり秩序は、子どものこのような侵犯に対して、おのれを守ろうとし、子どもの本来の姿を排除し、子どもを同化する⁷⁾。一方、子どもの方も、本来の姿を覆いかくして秩序のなかに組みこまれることで、自分の場所を確保しようとするが、大人はそのことを「発達」と呼び、それを促すものを「教育」と語る、と中村は言う⁸⁾。

この中村の解説から、我々は現在の子どもの観に潜む本質的な問題性を理解することができる。つまり、我々は子どもを今日的な発達段階の特徴において捉えているが、それはあくまでも我々大人が自分の世界の秩序に従った子どもに対する把握に過ぎず、子どもの本質に立つとらえ方とはいえない。では、我々は一体どのように「子ども」を認識すべきであろうか。中村はこの答えを日本および他の多くの社会にもある「子どもは神に近い存在である」という古来の

認識において探り、その見方を柳田国男の子ども論に基づき説明している。

中村によれば、かつての日本を含む多くの社会では、子どもを神に近い固有な存在として認めている。ただし、普通の生活において、この考え方は直接表面化することなく、子どもは潜在的な神と考えられた。その観点を支持する理由として、子どもの遊びの源がほとんど神を祀る行事にあることが挙げられる。だが、現在では社会の発展に伴い、神社を中心とした村落共同体の文化が失われ、神事への関心が衰退していった。それとともに、子どもの参加した多くの行事が、遊戯として片隅に取り残され、子どもが担っていた役割、つまり、「神がみずからを顕わして、人間の世界に自分の意志を伝える仲介者」としての作用が徐々になくなった⁹⁾。さらに中村は、子どもの神としての役割について、その本質は、「荒ぶる神」であり、「異文化」として大人に対峙すると言う。それは、我々大人が子どもに対面する時に取るべき姿勢に表れる。このありようを中村は次のように記述する。

子供がただ純真だとか無垢だとかいうのではなしに——荒ぶる神でもあるものとして——同時に荒々しく残酷であること、つまり根源的自然をも体現していることを意味している。ともあれ、いま私たちにとって必要なことは、子供の世界あるいは宇宙を大人の眼から見た基準やあるべき姿のなかにとじこめるのではなく、そうした宇宙の独自性と始源性をトータルにとらえることであろう。¹⁰⁾

つまり、中村によれば、子どもは本質的に、純真でありながら時には乱暴に行動して我々大人の基準・秩序に反するという両義性を持っている。このような子どもの本質が、我々に恩恵を与えると同時に災害をもたらす。それゆえ、子どもは、人々の生活を脅かす自然と重ね見られ、根源的自然を体現している

存在とされたわけである。そのため、根源的自然としての子どもに向き合う時、我々は大人の基準を用いて彼らを束縛するのではなく、むしろ彼らを一つの独自の宇宙として認識し、そのまま捉えるべきなのである。そして、大人がこのように子どもを捉えることができた場合、「子供は、私たち大人が世界を捉えなおし世界と新しい関係を結ぶために大きな示唆を与えてくれ」¹¹⁾、そこに、子どもと大人を包む独自の宇宙観が成り立ち、我々はその世界観から、子どもとの接し方や、新たな教育・療育の可能性を見出すことができる。

以上の視点をまとめてみよう。古代において子どもは「小さい大人」、「若い大人」であるように認められ、大人とほとんど同一視されていた。しかし、それとは逆に、現代、子どもは大人の前段階であるように考えられており、特に発達の特徴という側面において大人と区別されている。しかし、中村によれば、この二種類の子ども観はいずれも大人の基準から子どもを認識することから生じた誤解で、子どもの本質は別のところにあるという。子どもの本質は、純真性と反秩序性を併せ持つ両義的な存在といえる。そのような子どもを中村は「神に近い存在」であり、根源的自然を体現する一つの独自の宇宙とみなす一方、時には秩序を破壊する「荒ぶる神」ともなると解釈する。そして、彼は、そうした独自の宇宙観が我々大人に世界との関係の新しい可能性を示してくれると積極的に評価するのである。それゆえ、現在我々が様々な社会問題の縮図と見る「子ども」問題について考える場合、従来なされてきた子どもに対する固定観念を打破するほどの「価値の転換」が喫緊な課題となるのである。

以上見てきた中村の子ども観は、およそ 30 年前に提唱されたものにもかかわらず、未だ現在の一般的な教育理念の中には広がりを見せていない。だが、こうした傾向とは別に、「治療教育」においては、生きづらさや障害を持つ子どもを、従来の枠組みを脱し、「パトスの人間」として理解する傾向が現れている。具体的には、彼らを、劣った者・弱い者・人間の進化を遅らせる者として見るの

ではなく、その特殊性への注目ゆえに、かえって大衆の指導者、人類の教師と認める見方が現れてきている¹²⁾。言い換えれば、「治療教育」という特殊な教育領域において、中村の考えた「価値の転換」がすでに起きており、川手の言うように、「治療教育」には、現代文化と一般常識的な既成概念を根こそぎ覆す潜在力が存在するといえるのである¹³⁾。そのため、現代文化や一般的な教育の問題を相対視し、克服するために、治療教育における「価値の転換」に検討を加えることは重大な意味がある。

第2節 治療教育における「価値の転換」

障害を持った人に対する一般的な認識には、まだ偏向した考え方が残っている。すなわち、障害を持った人は、社会にとって有用な能力があるものの、一定の評価基準から見れば、身体的あるいは知的に劣った者として位置づけられる。しかし、中村によれば、それは生物学における近代科学的思考の代弁者である「進化論(ダーウィニズム、Darwinism)」に毒された見方とされる¹⁴⁾。しかも、この進化論に代表される「近代の知」の弊害は、我々の考え方に浸透し、その影響は「治療」や「教育」など、一見「近代の知」と関係ない分野にまで及んでいる¹⁵⁾。川手はこうした「近代の知」の表面的能力主義(進歩・発展・発達など)が教育の荒廃につながっていることを危惧し、何とかしてその呪縛から脱却しなければならないと主張する¹⁶⁾。中村は、その脱却の鍵を「臨床の知」に見、川手は共鳴する中村の「臨床の知」に基づく「治療教育」の実践を提案する。以下では、「臨床の知」に基づいた治療教育における「価値の転換」を提起する川手の取り組みについて見ていこう。

「治療教育」では、障害を持った子どもは「パトスを感じている人間」、「痛みを知る人間」と考えられている。一般的には、痛みはマイナスなイメージしか持たないが、川手は痛みに積極的な意義を付与している。つまり、痛みが本人

に苦しみをもたらす一方、本人は痛みを通じて、「そこに自分とその身体が存在していることを知る」貴重なすべをもつのである。そのため、痛みは、川手によって「自らを知ることすなわち自己認識の一つの道」とみなされる¹⁷⁾。そのことをより深く理解するための手立てとして、川手は古代ギリシア神話のオイディプス王の物語が挙げる。この物語の粗筋はこうである。

テーバイ王のライオス (Laïos) は息子オイディプスが父殺しとなる宿命を持つとの神託を受け、その神託の実現を恐れて、ライオス王は実子のオイディプスを殺害しようとする。しかし命を受けた羊飼いは赤子を殺すに忍びないので、オイディプスを隣国の羊飼いに託した。その時オイディプスは踝に孔を開けられ両足を縛られていたので、「足部に傷を持つ」子どもと考えられていた(オイディプスとは、古代ギリシア語において、**Oidi**=腫れた **Pus**=足という意味)。

このようにして、オイディプスは隣国のコリトン王ポリュボス (Polybos) の実子として育てられ、王宮で凛々しい若者に育っていった。ある日オイディプスは自分が捨て子であったという噂を耳にして、真相を知るためにデルフォイの神託所へ向かう。そこで自分が父殺しとなるという運命を知った。オイディプスはポリュボスを父と思い、父を手にかけることのないようにコリトンに帰らずテーバイへ旅に出た。旅の途中、オイディプスは実父ライオスに遭遇し、道を譲る譲らないの争いとなり、ライオスを殺してしまった。神託の言葉は結局、実現してしまったのである。

その後オイディプスは化け物スフィンクスの謎を解き、スフィンクスを退治した。その功績によって、オイディプスはテーバイに王として迎え入れられ、先王ライオスの后で実は自らの母でもあるイオカステ (Iokastē) と結婚し、二男二女の子どもを設けた。ところがそのうちに、都が疫病に襲われ、それは先王ライオスを殺した人がまだ罰せられていないためであると再び神託によって告げられる。

オイディプスは自分が殺害者であることを知らず、殺害者の捕縛を命ずる。罪人探索の結果、自分こそが父ライオスの殺害者であり、かつ愛した妻が母親であるという真実に直面することになる。オイディプスは証明を求めるために、先の羊飼いを呼んできた。羊飼いはオイディプスの踝の傷跡という決定的な証しを見て、オイディプスその人が確実に託されたあの子であり、ライオスとイオカステの息子であると証言した¹⁸⁾。

以上がオイディプス王の物語の概要である。川手はこの物語を、「自分自身を知ることの痛み」、「自己認識の痛み」を我々に教えてくるものだと解釈する。その理由は、オイディプスの「罪人の探索は、実は自分自身の探求」であったこと、足部の傷は「オイディプスにとって最大の弱点であるとともに、自己認識の究極の顕現であった」ことにあると説明される¹⁹⁾。つまり、オイディプス王は足部の傷を負ったまま、自分自身を探す道を歩み続ける。そして、最後に彼は自分の足部の傷に気づき、その傷を知ることによって、本当の自分を知りようになり、自己認識の極みに達成したのである。

川手は、このオイディプス王の物語は現代における「治療教育」に大きな示唆を与えるという。つまり、障害を持つ子どもたちは、足部の傷を負うオイディプス王と同様に身体の傷あるいは心の傷を背負っている存在である。彼らは折に触れて自分の傷に気づき、傷の存在を知ることによって自己という存在の特殊性に向き合う²⁰⁾。こうして、「不完全」、「劣悪」と思われる傷や痛みは、「価値の転換」を遂げ、積極的な意味で障害を持つ子どもの自己認識のきっかけになるのである。

一方、オイディプス王の物語において、オイディプス王に傷の真相を知らせ、本当の自分を認識させるために、羊飼いは重要な役割を果たしている。羊飼いの証言がなければ、オイディプス王は自分の傷に気づいても、傷の背後に潜む真相を知ることができず、本当の自分を認識することに至っていない。それゆ

え、「傷を知る」ことから「自己を認識する」ことに至るまで、真相を導いてくれる人が必要である。その人はオイディプス王にとって、羊飼いであるが、障害を持つ子どもにとって、「治療教育」に携わるスタッフやボランティアなどである。そして、「真相を導く」という過程は「治療教育」そのものである。

「治療教育」は名前から理解すれば、生きづらさや障害を持つ子どもの傷や痛みに基づき、「治療」することによって、彼らを「教育」し成長させる営みを指す。しかも、人間関係でいえば、「治療」と「教育」はいずれも、強い立場の医者・教師が弱い立場の病人・生徒を、弱さを克服するように助けてあげるイメージが一般的である。だが、中村・川手によれば、従来のこのようなイメージは「治療教育」において、すでに払拭されているという。すなわち、上下関係の価値秩序は、「助ける側が助けられる側から実に多くのことを学び、何か非常に大事なものをもらっている」²¹⁾という「逆転した価値観」へと変容している。何故、この領域で価値の転換が生じたのだろうか。それは、「治療教育」というのは、決して一方的な働きかけで成り立つものではなく、「痛みの共有」、「互いのコスモロジカルな共振」がなければ成立しないものだからである²²⁾。近現代の医学的「治療」においては、科学的・解剖学的分析がより重視されているため、この「痛みの共有」、「互いのコスモロジカルな共振」という考え方があまり見られないが、我々は医療に関しても、一部の土着文化からからこの考え方の表れを見出すことができる。

例えば、フィリピンでは素手で患者の体内から病気の原因になる罹患部位を取り出すという土着の民間療法——「心霊手術」がある。その場合、身体の中に本当に手を入れて手術をするのではなく、治癒効果を増すために、身体の内側で起こっていることと同じことを外側でも見せるために動物の臓物を使ったりする²³⁾。

これは一見非科学的迷信ともいえるが、川手はここに「大小宇宙の共振」と

いう古来の知恵が含まれていると解釈する²⁴⁾。人のイマジネーションの力は大きく、呪術師が行う疑似的心霊手術が患者のイマジネーションに働きかけ、患部に作用を及ぼすという「大小宇宙の共振」の作用は、実際に「プラセボ効果（患者が疑似薬を本物の薬であると信じて飲むことで治癒が起こること）」をもたらす。そして、中村も川手の見方に賛同し、このような「魔術の知」は単に非科学的なものというのではなく、そこには人間のコスモロジーに対する根源的欲求が働いており、人間を治癒させる有効な働きがある、と「心霊手術」に積極的な意義を見る²⁵⁾。心霊手術的治療に見られる想像的擬似的認知体験の交流は、助ける側の小宇宙と助けられる側の小宇宙が共振する、まさに「臨床の知」における真のパフォーマンス＝身体的相互行為であるといえる。この擬似的な「痛みの共有」ともいえる共振を通して大宇宙と共鳴し、治癒が実現することになる。

このように、「痛みの共有」、「互いのコスモロジカルな共振」を通じて、病む者と癒す者という二元的対峙は破壊され、病む者の中から自然な治癒力が立ち現れるのである。ここに「価値の転換」が再び現れてくる。すなわち、痛みを持つ者たちは、助けられる弱い存在ではなく、かえって、川手の言う大衆の指導者・人類の教師として、自分の痛みを想像の力を借りて癒すことができるのである。このような「治療教育」は一方向的な働きかけではなく、助ける側と助けられる側の間における、「痛みの共有」を通じた共同成長だと言っても過言ではない。それこそが真の「治療教育」の形といえる。

最後に、「治療教育」における痛みの共有が実践面・技術面においてどのようにして可能なのが問題として残っている。次節でこの問題について検討してみよう。

第3節 芸術による教育環境づくり

中村・川手論によれば、真の「治療教育」とは、助ける側と助けられる側の共同成長として描かれていた。その共同成長は「痛みの共有」なしに成立しないが、中村によれば、それに先立ち、「痛みの共有」の実現には「開かれた感受性」が不可欠であるとされる²⁶⁾。この「開かれた感受性」はどこから獲得できるのだろうか。中村はそれについて、芸術に接することによって、持続に訓練すれば修得できる、と回答している²⁷⁾。川手もドイツでの自身の経験から、中村同様、「治療教育における芸術行為」の重要性を説明している²⁸⁾。すなわち、中村と川手はともに、治療教育のなかに深い意味での芸術性が存在していないと、子どもは本当には癒されてゆかないと考えたのであった。治療教育の従事者も、ただやる気があるだけでは不十分で、しっかりした技術論としての芸術がないと、長続きしないし実も結ばないと言う²⁹⁾。

では、芸術は治療教育において具体的にいかなる役割を果たすのであろうか。

まず、子どもは創作的芸術行為において、芸術作品を通して、大宇宙に共振する自分を身体的に表現する。または鑑賞的芸術行為において、作者の創作体験を身体的に追体験し、作者・作品を通して大宇宙との共振を実現する。ここでは、「臨床の知」における真のパフォーマンスが発揮され、芸術行為自体が身体的相互行為となるのである。治療教育の場合、教育者が子どもと創作や鑑賞の芸術行為を共に体験することによって、大宇宙や子どもとの「互いのコスモロジカルな共振」ができ、「痛みの共有」が可能となる。そして、普遍や人と人が呼応するこのような芸術行為の積み重ねによって、子どもは自らが背負う痛みを知り、自己を発見するに至るのである。

次に、芸術は既成の規則や世間的権威を打ち破る力を持っている。「治療教育」の対象となる子どもたち自身も、そもそも常識的な教育の枠組みに当てはまらない子どもたちである。そのため、彼らのための「治療教育」は、均質的な価値

観に基づき、彼らを少しでも社会に役立つ人間にしてゆく訓練的教育であってはならない。彼らの一人一人の内に潜む能力を呼び起こし、その可能性を引き出す教育でなければならない³⁰⁾。換言すれば、「治療教育」を考える際に、頭脳重視・成績偏重をするような一般的な教育の基準に準ずる必要はなく、むしろその基準を打破しなければならない。そして、その打破の力を持っているのが芸術である。芸術行為の中に表面的でない人間本来の美しさ・普遍的「生」の真実が潜在している。その美しさや「生」の真実はいかなる世間的評価や権威づけとも無縁の絶対的なものであるため、そうした何も色付けされていない芸術によって子どもたちに、すべての「障害」を乗り越える道が開かれる³¹⁾。権威付けられたものや常識を超えて、普遍や人間観の相互作用を促す芸術こそが、治療教育の場で痛みを力に変えることができる。この意味で、治療教育の現場において、芸術行為、芸術教育が重要になってくるのである。

最後に、このような「治療教育」に対する芸術の効果が、「治療教育」の範囲を超えて、一般的な教育の場にも適用可能であるということを示唆してみたい。

本論の第一節で、「子どもは神に近い存在であり、しかも荒ぶる神である」という中村の言葉を紹介した。これは、我々のような近代の知に制約・支配されている大人と根本的に違い、子どもが根源的自然を体現する一つの独自の宇宙であることを意味している。教育の本当の目的はこのような子どもたちの本性を尊重し、そこに潜む根源的自然を体現する能力を引き出すことにある。ところが、現実の教育の場面では、本末転倒になっており、荒ぶる神としての子どもは不成熟・不完全な存在であるように考えられ、現実社会に適応させるように、大人の理論に従って子どもの本性を変え、子どもを大人に同化させることが一般的な教育の目標になっている。

こうした現代の教育の実態について、中村と川手は次のように批判する。子どもの自主性・内的従事性³²⁾を妨げる管理的な教え込み、想像力を著しく妨害

するコンピュータや映像機器の導入、競争心を煽り闘争本能に火をつける成績偏重やスポーツ礼賛³³⁾……。暴力はいけないと言いながら、暴力に訴えざるを得ない状況に子どもたちを追い詰めているのが現在の教育の実態である、と³⁴⁾。

そして両者（中村と川手）は、現実の能率・効率優先の教育が、子どもの開かれた感受性を閉塞させる方向に進んでいることをもっとも危惧するのである³⁵⁾。こうした教育の実態と彼らが描く教育の本当の目的の間に大きなギャップが存在している。このギャップを埋めるためには、学校教育に「臨床の知」の一つとしての芸術を取り入れることが必要となる。それによって、抑圧やゆがめられた心身を開放し、自己の内奥から貫かれた「開かれた感受性」を回復させることが可能となる。とりわけ、中村は芸術の中で演劇の重要性をと教育効果を強調する。中村は、演劇という芸術の持つ統合性・多様性・場の持つ力が「開かれた感受性」の回復に比類ない力を発揮すると考え、演劇による教育環境づくりを提唱している³⁶⁾。

ただ、教育におけるこのような「開かれた感受性」の回復は、演劇にとどまらず、広く芸術全般に有効的であるように思われる。何故ならば、演劇・音楽・造形芸術などの全ての芸術活動は、芸術創作でも芸術鑑賞でも、特定の非日常的な場に入り、豊かな想像力を起点とする体性感覚を介して芸術や芸術の中に含まれる自然に共鳴・共振するからである。そして、こうした芸術による体性感覚を通して、我々は普遍性や、自分らしさ、自他の不完全性、痛み、喜び等を感じ取り、力強く肯定し表現することが可能となるのである。この意味で、今日、我々は芸術を介した「臨床の知」の応用倫理的実践の可能性を治療教育、さらには広く教育に波及すべきものとする。

参考文献

中村雄二郎『中村雄二郎著作集 VI パトス論』岩波書店、1993年

中村雄二郎『中村雄二郎著作集 IX 術語集・問題群』岩波書店、1993年

中村雄二郎・川手鷹彦『心の傷を担う子どもたち——次代への治療教育と芸術論』誠信書房、
2000年

註

- 1) 中村雄二郎『中村雄二郎著作集 VI パトス論』岩波書店、1993年、133頁、175頁参照
- 2) 中村雄二郎・川手鷹彦『心の傷を担う子どもたち——次代への治療教育と芸術論』誠信書房、2000年、65頁
- 3) 同上書、85-87頁参照
- 4) 中村雄二郎『中村雄二郎著作集 IX 術語集・問題群』岩波書店、1993年、70頁参照
- 5) 同上書、69頁
- 6) 同上書、70-71頁参照
- 7) 同上書、71頁参照
- 8) 同上、参照
- 9) 同上書、70頁参照
- 10) 同上書、71頁
- 11) 同上書、72-73頁
- 12) 中村雄二郎・川手鷹彦『心の傷を担う子どもたち——次代への治療教育と芸術論』誠信書房、2000年、80頁参照
- 13) 同上書、173頁参照
- 14) 同上書、63頁参照
- 15) 同上書、64頁参照
- 16) 同上書、64頁参照
- 17) 同上書、161頁参照
- 18) 同上書、160-163頁参照

19) 同上書、163 頁参照

20) 同上、参照

21) 同上書、65 頁

22) 同上書、41 頁参照

23) 同上書、40 頁参照

24) 同上、参照

25) 同上書、40-41 頁、参照

26) 同上書、41 頁参照

27) 同上書、87 頁参照

28) 同上書、86 頁参照

29) 同上書、86 頁参照

30) 同上書、152-153 頁参照

31) 同上書、154 頁参照

32) 川手によれば、内的従事性とはドイツ語 **innerliches Engagieren** のことである。子どもの内的従事性を育むこととは、歌唱・器楽・朗読・演劇・手芸・工作等、一切の創造的・芸術的作業によって、子どもの裡に高い能動性を生み、周囲の世界や人生の諸事に絶えることのない興味と愛着を持たせることである。逆にこの内的従事性が育まれないと、何事にも興味が持たず、無関心・無感動な人間となる。同上書、216-217 頁、参照

33) スポーツ礼賛とは、スポーツすることを褒め称えることではなく、過度にスポーツの中にある競技性を提唱することを意味する。川手の説明によると、スポーツ礼賛の消極的影響として、団体競技のなかには徒らに闘争心を煽り、心的諸力—思考・感情・意志のうち「意志」を極端に働かせて、それらの調和・均衡を著しく崩しかねないものがある。また個人競技においても、その勝敗や順位づけを偏重すれば、子どもたちの心に不必要な功名心・排他感情・嫉妬・復讐心あるいは敗北感・コンプレックス・嫌悪感等々を植えつけてしまう。同上書、217 頁、参照

34) 同上書、152 頁参照

35) 同上書、41 頁参照

36) 同上書、104-111 頁

The Artistic Practice of “*Rinsho no chi* (clinical knowledge)”

Centering on educational issues for children

Zheng Xiyin

Graduate School of Letter (Doctor's Degree Program),

Hiroshima University

To overcome the abuse of rational "modern knowledge," the philosopher Yujiro Nakamura proposed a new type of knowledge called "*Rinsho no chi* (clinical knowledge)" to grasp facts within individual places and times, taking into consideration the ambiguity of the subject. In addition, Nakamura argues that many problems converge when dealing with the problem of "children," especially while considering today's cultural, social, and political issues, as subjects to succeed in the future. Therefore, in this paper, I would like to grasp the "child" problem in the framework of *Rinsho no chi* and show the direction of the solution. I want to think about the problems of the child by highlighting the feelings leaking from the approach of scientific knowledge, especially issues such as bullying, violence, school refusal, and the problems of children with developmental disorders. In this paper, based on theory of Nakamura and Takahiko Kawate (an expert on treatment education), I will examine the availability of the artistic

practice based on *Rinsho no chi* on therapeutic education and try to prove the applicability of the practice in all fields of education.